

巻頭言

悪魔は勤勉である

高原 孝生

(PRIME 所長)

その昔、決して他人の悪口を言わないという修道女に、司祭が「悪魔について述べよ」と意地の悪い問いをかけた。少し考えて返した答えが、「悪魔は勤勉です」だったという。

世界をコロナ禍が覆っている。ウイルスは変異を続け、感染の拡大が収まらない。2020のNPT再検討会議は延期に延期を重ね、今年1月に開かれることになったものの、またも8月へと延期が決まった。

延期の間に核保有国では、核兵器の「近代化」が着々と進んでいる。明らかな核戦力増強の動きも見られる。これらは、核兵器への依存を減らすという、国際社会が積み重ねてきた合意を、正面から踏みにじる行為だ。

そもそもNPT再検討会議は、まさにこのような核大国のおこないに対し、非核兵器国がチェックをかける機会として設けられている。この四半世紀にそのプロセスが強化され、5年ごとの再検討会議に向けて開催される三回の準備委員会、および毎年の国連総会が開かれる際には、世界のNGOがサイドイベントを開いて、互いの経験と知見を学び合い、また諸国の外交官たちへの働きかけを、積極的におこなってきた。この機会が奪われているのである。

年明けには、それを代替すべく、いくつかのオンラインイベントがピースボートなどのNGOによって開かれた。うちINES（地球的責任のための技術者・科学者国際ネットワーク）の会合では、いま急速に宇宙に広がる軍備競争と危険な「ミサイル防衛」邁進に対して、何とかストップをかけねばならないと、諸国の専門家が訴えた。一握りの利益集団が、地獄へと地球上の全生命を道連れにしつつある、そのことを知る専門家は、真実を人々に伝え続ける責任がある、と。

広島・長崎以来、核戦争が起きていないことを、核兵器のおかげだ、とする倒錯した論理がある。核兵器には「抑止力」があり、それが平和を守っているというのだ。しかし核兵器は人間の作った道具に過ぎない。それが炸裂するのを押しとどめている本当の抑止力は、いま権限を持たされている者の理性と責任感、平和を希求する民衆の意志とその表現、そして二度と繰り返してはいけないと訴える被爆地の声に他ならない。逆に言えば、それらが弱まったときが危機だ。大殺戮の準備をととのえているという現在の状況への想像力を、あらためて私たちは喚起しなくてはならない。

バグウォッシュ会議を創設したジョセフ・ロートブラットは、人道と科学を掲げ、核と戦争の廃絶のために、2005年に96歳で亡くなるまで、強大な核権力と闘い続けた。なぜ、との問いに、「それ以外の道は、私には考えられなかった」と晩年、インタビューに答えている。

悪魔が着々と積み上げつつある既成事実に、私たちも屈するわけにはいかない。諦めずにあらがいつづけ、正気の道へと世界を引き戻す努力を続けよう。今ある世界とは異なる未来を描き求める人間の営みは、かつて今も存在する。今号の論稿が読者のそうした試みに少しでも資するなら、これに過ぐる喜びはない。